

書 評

角田 亘（編）
北原崇真，佐藤 慎，岩戸健一郎，中嶋杏子（編集協力）

回復期リハビリテーション病棟 マニュアル

澤田 辰徳
（東京工科大学，作業療法士）



本書における読者への利益は大きく分けて2点あると考える。1点目はチーム医療の成熟への貢献である。医療制度の中に回復期リハビリテーション病棟が認可されてから20年ほど経過したが，その病床数およびかわる医療職種は激増した。結果として，PT，OT，STといったリハ職種のみならず，医師や看護師，社会福祉士等，さまざまな医療関係者がリハに携わるようになった。また，昨今の実績指数の導入により，効果的なリハをいかに実施し，早期退院を目指すかについて拍車をかけるかたちとなった。これら一連の課題に関しては，チーム医療としての成熟が必須である。良質なチーム医療には，各職種の専門性をお互いに理解し，尊重したうえで協働することが重要であるが，本書には

医師の診断をはじめとしてリハ専門職はもちろんのこと，看護のケアや栄養に携わるまで，至るところに各職種がなすべきことが記載されており，これらを網羅していることがうかがえる。

2点目は題名にあるように，回復期リハとしての質の向上である。評者は，回復期リハビリテーション病棟の使命とは急性期を脱した対象者に対して地域生活を送るための準備を集中的に行うものであると理解している。そのためには，心身機能の回復のみならず，退院後につながる生活支援をすることは必須である。本書は両者において記載されており，その内容は基本的な内容から栄養および訪問リハまで多岐にわたり，広範囲に網羅されているといえよう。特に，評者のOTという専門

性から述べると，基本的なセルフケアのポイントから買い物や自動車運転といったIADLに至るまで広範囲に記載されていることは，本書の守備範囲の広さを感じる。また，本書は実際の病院での取り組みを基に一貫して記載されており，最後に症例報告が掲載されていることも読者の理解を深めるであろう。

このように，本書は幅広い情報が網羅されており，多職種が協働的にかかわる回復期リハビリテーション病棟に勤務する者にとって，広く情報収集するには有用である書籍と思われる。

B6変型 424頁 3,400円＋税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650